

ルネ・シフェール訳『源氏物語』の
作中和歌における「あはれ」の考察

*A Study on French Translations of “aware” :
For the waka of “Le Dit du Genji” by René Sieffert*

Hiromi Iizuka
飯塚ひろみ

要 旨

本稿は、ルネ・シフェールによる『源氏物語』のフランス語訳『Le Dit du Genji』の中から「あはれ」が詠まれた作中和歌を抽出し、「あはれ」に該当する訳語について論じたものである。第1節で「あはれ」の訳語を要素別に整理し、第2節以降で原歌と翻訳を詳細に考察した。一連の考察の結果として、「あはれ」の訳語として20種の語が確認でき、「秋のあはれ」を表す語としての「*mélancolie*」（愁い、憂鬱）の固定的な使用（第2節）や、「*pitié*」（哀れみ）が他者からのそれを求める訳として用いられていること（第4節）、「情景」を表す場合と「人の心」を表す場合で用いられる訳語が異なること（第5節）、詠嘆の間投詞「*las*」が故人に向けた歌に用いられていること（第8節）などが明らかになった。

キーワード：あはれ、フランス語訳、源氏物語、和歌

はじめに

先般、和歌に用いられた「あはれ」のフランス語訳について考える機会を持った¹。その際に、「あはれ」を含む百人一首歌のフランス語訳に先行用例を求めたところ、「あはれ」の訳語として、名詞の「*pitié*」（哀れみ）が5例、間投詞の「*hélas*」「*las*」（ああ）が2例、名詞の「*désolation*」（悲痛、悲嘆）、名詞の「*émotions*」（感動、感激）、慣用表現の「*le cœur serré*」（胸が締め付けられる）が1例ずつ認められた²。この結果だけを見ると、「あはれ」の訳語としては「*pitié*」が第一選択肢かとも思わ

れたが、「あはれ」の多義性を考えると物足りない感があった。そこで、本稿では「あはれの文学」と称される『源氏物語』を対象に、ルネ・シフェール (René Siefert, 1923-2004) によるフランス語訳『Le Dit du Genji』³の作中和歌に用いられた「あはれ」の訳語を検討し、今後の翻訳活動における訳語選択の可能性を探ってみたい。

1. 「あはれ」の訳語

『源氏物語』の作中和歌のうち、「あはれ」が用いられたものは26首ある。巻別では、夕霧巻4首、竹河巻3首、葵巻2首、朝顔巻2首、手習巻2首、帚木・若紫・紅葉賀・花宴・須磨・明石・薄雲・玉鬘・藤袴・横笛・権本・総角・蜻蛉巻に各1首ずつである。人物別では、光源氏8首、夕霧2首、雲居雁2首、夕顔・藤壺・六条御息所などその他の人物が各1首ずつである。

それぞれの歌と翻訳全体の考察は次節以降に譲ることとし、まずは26首のシフェール訳の中に確認された、歌ことばとしての「あはれ」の訳語を一覧しておきたい。「はじめに」に述べたように、百人一首歌の訳においては「pitié」(哀れみ)が際立っていたが、シフェール訳『源氏物語』の作中和歌には「あはれ」の訳語として実に様々な表現が見られる。本稿での考察の便宜上、以下のように分類した。

【愁い】*mélancolie* 4例

【哀れみ】*compassion* 2例 *compatir* 1例 *pitié* 2例 *plaindre* 1例

【苦悩・悲嘆】*poignant(e)* 2例 *poindre* 1例 *affliction* 1例

【感動】*émoi* 2例 *émotion* 1例 *émouvoir* 1例 *toucher* 1例 *admiration* 1例

【詠嘆】*las* 2例

【思い】*pensée* 1例 *sentiment* 1例

【その他】*malheur* (不幸) 1例 *charme* (魅力) 1例 *goûter* (味わう・楽しむ) 1例

以上のように、「あはれ」の訳語として20種類の語が認められ、全用例数は27である。考察対象が26首であるのに対して「あはれ」の用例数がそれより多いのは、「あはれ」に相当する語が1首の中に複数見られる歌があるためである。また、26首のうちの1首は「あはれ」に該当する語が用いられていなかった。シフェールはこれらの訳語をどのように使い分けているのであろうか。上記の分類に沿って詳細を検討

してゆくことにする。

2. 「愁い」を表す訳語 —mélancolie—

まずは、「あはれ」の訳語として最も多く用いられた「mélancolie」(4例)について考察する。歌とシフェールによるフランス語訳(以下「仏訳」)、および一行ごとの訳し戻しを掲出し、「あはれ」に該当する部分に下線を付すこととする⁴。なお、本稿では「あはれ」の訳語に主眼を置くため1行ごとに逐語訳したが、この形式においては訳全体の意味として整わない場合があることを断っておく⁵。

①のぼりぬる煙はそれと分かねどもなべて雲居のあはれなるかな

(葵卷②48頁、秋・鳥辺野・源氏独詠)

Je ne sais lequel	私はどれかわからない
est la fumée qui monta	のぼった煙が
du bûcher funeste	不吉な火葬の
mais la vue de ces nuages	けれども雲の眺めは
m'emplit de <u>mélancolie</u>	私を <u>憂鬱</u> でいっぱいにする
(Les mauves, ①p 192)	

②深き夜のあはればかりは聞きわけどことよりほかにえやは言ひける

(横笛卷④355頁、秋・一条宮・落葉宮→夕霧)

Au cœur de la nuit	真夜中に
j'en ai <u>la mélancolie</u>	私は <u>愁い</u> を
toute ressentie	強く感じた
mais ne sais d'autre langage	けれども他の言葉を知らない
que les airs de ma cithare	私のチターの表現以外の
(La flûte traversière, ②p 170)	

③山里のあはれをそふる夕霧にたち出でん空もなき心地して

(夕霧卷④403頁、秋・小野・夕霧→落葉宮)

Du séjour des monts	山里の
<u>mélancolie</u> vient accroître	<u>愁い</u> が増やす
le brouillard du soir	夕方の霧

or me semble que le ciel	空のように思われる
à mon départ fait obstacle	私の出発を妨害する
(Brouillard du soir, ②p 190)	

④山里の秋の夜ふかきあはれをももの思ふ人は思ひこそ知れ

(手習巻⑥328頁、秋・小野・中将→浮舟)

<u>La mélancolie</u>	<u>憂鬱</u>
du cœur de la nuit d'automne	秋の真夜中の
au séjour des monts	山里に
qui a lieu de s'affliger	嘆く理由がある人は
doit certes la ressentir	確かにそれを感じるはず
(Exercices d'écriture, ②p 646)	

①は葵の上の葬送の後の源氏の独詠である。葬送の煙がどの雲のもとに昇ったのかはわからないが、空一帯に「あはれ」を感じるという歌で、情景として煙と雲が交じり合っている。「あはれ」には葵の上を悼む思いが表象されている⁶。②は夕霧と落葉宮が「想夫恋」を弾く場面である。「cithare」(チター)はヨーロッパの弦楽器で、ここでは落葉宮の弾く琴を指す⁷。③は、夕霧が落葉宮の滞在する小野で詠んだものである。霧と空の縁語関係が①の情景に似る。④も詠み手は異なるが小野で詠まれたものである⁸。

4首全体を見渡すと、③④が「小野」で詠まれたものであり、「山里」の訳語「séjour des monts」が共通することがわかる。②④は「深き夜」「夜ふかき」と時間帯が共通し、それを表す訳語も「cœur de la nuit」(真夜中)で同一である。②③は、巻は異なるがどちらも夕霧と落葉宮との贈答である。①③では「煙」と「霧」、「雲居」と「空」といった景物の類似がある。このように、「あはれ」を「mélancolie」と訳出した4首にはいくつかの共通事項が顕著に確認できるのに加え、4首すべてが秋に詠まれた歌であることも注目すべき点である。自然の景物と相まって醸し出される「秋のあはれ」にふさわしい語として「mélancolie」が選択されたと考えることができるだろう。

3. 「哀れみ」を表す訳語 (1) —compassion・compatir—

「哀れみ」に分類される訳語として、「compassion」(2例)・「compatir」(1例)があ

った。「com」が「共同に、共に」の意の接頭辞であるので、「同情」の意味合いを持つ語である。

⑤おなじ野の露にやつる藤袴あはれはかけよかことばかりも

(藤袴巻③332 頁、秋、六条院、夕霧→玉鬘)

Aster de la lande	荒れ地のシオン
qui d'une même rosée	同じ露の
subis les atteintes	被害を受けた
dis-moi <u>ta compassion</u>	<u>君の同情</u> を教えて
ne fût-ce que pour la forme	たとえ形式のためであっても
(Les asters, ①p 565)	

⑥人の世のうきをあはれと見しかども身にかへんとは思はざりしを

(夕霧巻④489 頁、冬、雲居雁→藤典侍)

Vous <u>compatissez</u>	あなたは <u>同情</u> する
à l'infortune d'autrui	他人の不運に
et cela au point	それも
de ne plus vous souvenir	もはやあなたが顧みないほどに
que votre sort est le même	あなたの運命が同じであることを
(Brouillard du soir, ②p 231)	

⑦あはれてふ常ならぬ世のひと言もいかなる人にかくるものぞは

(竹河巻⑤90 頁、夏、玉鬘大君→蔵人少将)

<u>Compassion</u>	<u>同情</u>
en ce monde impermanent	無常のこの世で
rien d'autre qu'un mot	ひと言に過ぎない
à quelle sorte de personne	どのような種類の人に
convient-il de l'appliquer	それがあてはまるのか
(La rivière aux bambous, ②p 299)	

⑤は夕霧から玉鬘への贈歌である。二人が近親（いとこ同士）であるためか、2人称の人称代名詞が「vous」（あなた）でなく「tu」（君）となっている点が印象的である。⑥は藤典侍からの歌への雲居雁の返歌である。原歌の「あはれと見し」の主体は雲居雁だが、仏訳では藤内侍が主体となっている。仏訳全体としても原歌の意を裏返

したような訳となっており、シフェールが何を参照して訳したのかが気になるところである⁹。「compatisse」(「compatir」(同情する)の二人称単数/複数形、ここでは単数)が「あはれ」に当たる¹⁰。⑦は藏人少将からの手紙に大君が書き付けた歌である。少将の手紙に「あはれと思ふ、とばかりだに一言のたまはせば」(竹河卷⑤89頁)とあったのに応じたものである¹¹。

4. 「哀れみ」を表す訳語 (2) —pitié・plaindre—

次に、百人一首の訳に多用されていた「pitié」を見る。

⑧八百よろづ神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれとなければ

(須磨卷②217頁、春、須磨、源氏独詠)

Les huit cents myriades	八百無数
de dieux sans doute daigneront	神々 間違いなくしてくださるだろう
me <u>prendre en pitié</u>	私を <u>気の毒に思う</u> ことを
de quelle faute en effet	実際に何の罪によって
pourraient-ils bien m'accuser	彼らは私を責めることができるのか
(Suma, ①p 278)	

⑨あはれとて手をゆるせかし生死を君にまかするわが身とならば

(竹河卷⑤86頁、春、玉鬘邸、藏人少将→中将のおもと)

Ayez <u>pitié</u>	<u>哀れみ</u> を持ってください
et prêtez-moi votre main	私に手を貸してください
si vous admettez	もしあなたが認めるなら
que pour ma vie ou ma mort	私の生死について
je m'en remette à vos soins	あなたの世話に委ねることを
(La rivière aux bambous, ②p 297)	

⑧は須磨で上巳の祓をした際の光源氏の独詠である。「pitié」は名詞の「哀れみ」であるが、「prendre en pitié」で、「哀れむ、気の毒に思う」となる。この部分についてはほぼ原歌に沿った訳となっているが、全体でいうならば、5行目の「ils」(三人称複数の人称代名詞、彼ら)にやや問題がありそうだ。物語の流れにこの歌を置いて考えれば、この「ils」には光源氏を排除したかった右大臣や弘徽殿女御などの人物がおのずと想定される。ところが、訳の中にも「ils」に該当する「dieux」(神々)が存

在する。「ils」=「神」としてしまうと、罪を着せたのも神であり、それを気の毒に思うのも神だということになる。もちろんそれでも解釈として無理ではないが、原歌にない表現を付加したゆえに、逆に混乱が生じているといえよう。⑨は玉鬘の大君への取次ぎを中将のおもとに嘆願する蔵人少将の歌である。二人称複数の命令形が繰り返される（「ayez」「prêtez」）ところに切実さが表れている。この2例の「pitié」に限っていえば、他者からの哀れみを要求する用法となっているが、シフェールがそれを意図したかどうかは、さらに地の文に用いられる「pitié」の考察が必要となろう。

「哀れみ」の訳語として、最後に「plaindre」（1例）を挙げる。

⑩契りあれや君を心にとどめおきてあはれと思ふうらめしと聞く

（夕霧卷④486頁、冬、致仕大臣→落葉宮）

Est-ce le destin	運命なのか
ce qui vous touche madame	あなたと関わること マダム
me tient à cœur	気にかかる
et si pour l'un je vous <u> plains</u>	一方であなたを <u>気の毒に思う</u>
pour l'autre je vous en veux	他方であなたを恨む
(Brouillard du soir, ②p 230)	

夕霧と落葉宮の事件により雲居雁が里に帰った折の致仕大臣から落葉宮への歌である。「 plains」（「plaindre」（気の毒に思う）の一人称単数形）は詠歌主体の行動を表すために用いられている。

5. 「苦惱・悲嘆」を表す訳語 —poignant(e)・poindre・affliction—

動詞「poindre」（刺す）が形容詞化したものが「poignant(e）」（胸を刺すような）である。「affliction」（悲嘆）の1例も併せて考察する。

⑪あはと見る淡路の島のあはれさへ残るくまなく澄める夜の月

（明石巻②239頁、夏・明石・源氏独詠）

De l'île d'Awaji	アワジ島の
à l'écume pareille	泡のような
<u>la poignante beauté</u>	<u>悲痛な美しさ</u>
dévoile et <u>mon émotion</u>	さらけ出す <u>私の感動も</u>
la nuit de lune limpide	澄み切った月の夜

(Akashi, ①p 287)

⑫かきつめてむかし恋しき雪もよにあはれを添ふる鴛鴦のうきねか

(朝顔卷②494 頁、冬、二条院、源氏→紫上)

Regrets du passé	昔の未練が
en cette nuit de neige	この雪の夜に
affluent de partout	いたる所に流れ込む
<u>poignant</u> le cri s'y ajoute	<u>悲痛な</u> 鳴き声がそこに加わる
du canard qui dort sur l'eau	水の上で眠るカモの

(La belle-du-matin, ①p 411)

⑬山里のあはれ知らるる声々にとりあつめたる朝ぼらけかな

(総角卷⑤239 頁、秋・宇治・薫→大君)

Aux bruits divers	様々な音
qui au séjour des montagnes	山里に
me <u>poignent</u> le cœur	<u>心を刺す</u>
je retrouve <u>les émois</u>	私は <u>感動</u> を見つける
des lueurs indéçises de l'aube	夜明けのぼんやりした光の

(Les boucles du cordon, ②p 370)

⑭あはれをもいかに知りてかなぐさめむあるや恋しき亡きや悲しき

(夕霧卷④446 頁、秋、三条邸、雲居雁→夕霧)

Pour vous consoler	あなたを慰めるために
il faudrait savoir la cause	理由を知る必要がある
de votre <u>affliction</u>	<u>あなたの悲嘆の</u>
désir de qui est encore	まだいる人への欲望か
ou regret de qui n'est plus	それとももういない人への哀悼か

(Brouillard du soir, ②p 211)

⑪は目の当たりにする淡路島の「あはれ」を、済んだ夜の月が限なく照らす光景を詠んだものである。「la poignante beauté」(悲痛な美しさ)が淡路島の情景を表す直接的な「あはれ」の訳であり、さらに情景に感動する源氏の「心のあはれ」を表す「mon émotion」(私の感動)が訳出されている¹²。⑫は、藤壺がかつて雪山を作った記憶に始まり、源氏がかかわってきた女性たちことを紫の上に話す場面において詠ま

れたものである。紫の上からの歌に対する返歌であるが、源氏の思いは亡き藤壺へと向かっている。技巧的な点に触れると、この訳では「le cri」（鳴き声）と「dort sur l'eau」（水の上で眠る）と「うきね」の掛詞が再現されている。また、「l'eau」（水）と「affluent」（「affluer」（流れ込む）の三人称複数形）の訳語により、原歌にはない縁語表現が創出されていることにも注目したい。⑬は大君と実事なく一夜を過ごした薫の歌である。「poignant」（「poindre」の三人称複数形）が山里で聞く様々な音（原歌では鳥の声）についての「あはれ」、その聴覚の中で夜明けの光（視覚）の「あはれ」を指す「les émois」（感動）が重ねて訳出されている。⑭は落葉宮への夕霧の心を見透かした雲居雁の歌である。情景（淡路島・山里の音・鳥の声）を表す「poignant(e）」および「poindre」とは異なる「affliction」（悲嘆）用いられている。景物の「あはれ」と人間の「あはれ」の使い分けがなされているのであろうか。この用例だけでは判断しえないため、前節の「pitié」同様に今後の課題としたい。

6. 「感動」を表す訳語 (1) —émoi・émotion・émouvoir—

本節では、語源を同じくする「émoi」「émotion」「émouvoir」を考察する。全部で4例あるが、うち2例は前節⑩⑫で確認したので、残りの2例を掲出する。「感動」と訳し戻したが、いずれも広く「心の高ぶり」を表す語である。

⑮君もさはあはれをかはせ人しれずわが身にしむる秋の夕風

(薄雲卷②463頁、秋・二条院・源氏→斎宮女御)

Vous aussi Madame	あなたも マダム
partagez donc <u>mon émoi</u>	<u>私の感動</u> を共有してください
lorsque me pénètre	私に入り込む時節なので
sans que nul ne le sache	誰にも知られずに
le vent des soirs d'automne	秋の夜の風が
(Ce mince nuage..., ①p 396)	

⑯をりからやあはれも知らむ梅の花だた香ばかりに移りしもせじ

(竹河卷⑤73頁、春・玉鬘邸・女房→藏人少将)

Ce qui nous <u>émeut</u>	私たちを <u>感動</u> させるのは
est affaire de circonstance	状況しだいだ
et fleur de prunier	梅の花

par son parfum n'est la seule その香りによってだけではなく
à retenir l'attention 注目を集める
(La rivière aux bambous, ②p 290)

⑮は、母が亡くなった季節である秋に思い入れがあるという女御に対し、それならば秋の風が身にしみている自分とおなじ「あはれ」を交わしてくださいと詠んだ歌である。訳語「mon émoi」（私の感動）からは、ふいに湧き出した源氏の恋心（下心）を読み取ることができる。⑯は、誰もが薫に思いを寄せることへの嘆きを詠んだ藏人少将の歌への女房の返しである。「émeut」（「émouvoir」（感動させる）の三人称単数形）が「あはれ」に該当し、「Ce qui nous émeut」で「私たちを感動させるもの」と、女房たちの心を動かす様子を表している。

7. 「感動」を表す訳語 (2) —toucher・admiration—

「感動」に分類しうる他の訳語を見てみよう。

⑰ねは見ねど あはれとぞ思ふ武蔵野の露わけわぶる草のゆかりを
(若紫卷①258 頁、冬、二条院、源氏→紫上)

Bien que n'aie vu 見ていないにもかかわらず
sa racine elle me touche その根を それは私を感動させる
la parente de l'herbe 草の近親
que désespérément cherchais 必死に探した
sous la rosée de Musashi ムサシの露の下に
(Jeune Grémil, ①p 124)

⑱から人の袖ふることは遠けれど立ちみにつけて あはれとは見き
(紅葉賀①313 頁、秋、二条院または内裏、藤壺→源氏)

De l'homme de Kara カラの人の
le langage des manches 袖の言語は
certes m'échappait 確かに私は理解できなかった
mais de ses gestes chacun けれどもそれぞれの身振りは
m'emplissait d'admiration 私を感嘆で満たした
(La fête aux feuilles d'automne, ①p 150)

⑱は恋しい藤壺に逢えない気持ちとその姪である紫の上に重ねた歌である。「あは

れ」に該当する訳語は「touche」（「toucher」（心を打つ）の一人称単数形）である。2行目の「elle」は3行目の「la parente de l'herbe」を指し、「l'herbe」（草）が藤壺、「la parente」（近親）が紫の上の喩えである。「elle me touche」で「草のゆかり（＝紫の上）が私を感動させる」、つまり源氏が紫の上に心を打たれたという表現となる。⑱の1-3行目は、「袖を振ること」と「古事」（ふること、中国の故事）との掛詞が意識された訳であると思われる。「あはれ」に該当するのは「admiration」（感嘆）である。藤壺と源氏の関係性を踏まえ、心の動きの表出を抑えた印象の訳語が選択されたと捉えることができようか。

8. 「詠嘆」の訳語 -las-

「詠嘆」を表す間投詞の「las」が用いられたのは次の2例である。

⑲人の世をあはれと聞くも露けきにおくるる袖を思ひこそやれ

（葵巻②51頁、秋、六条邸、六条御息所→源氏）

Apprenant le sort	運命を聞きながら
de celle qui las n'est plus	<u>ああ</u> もういないその人の
la manche couverte	覆われた袖
de rosée j'imaginai	露に 私は想像した
la peine de qui demeure	残っているその心痛を
(Les mauves、❶p.193)	

⑳来し方も行く方もしらぬ沖に出でてあはれいつくに君を恋ふらん

（玉鬘巻③90頁、不明、舟上（瀬戸内）、乳母子→故夕顔）

Au large voguant	沖にさまよいながら
d'où suis-je venue où vais-je	私はどこから来てどこに行くのか
ores plus ne sais	今はもうわからない
de quoi côté las tourner	どの方向に <u>ああ</u> 曲がるのか
pour ma dame mes regrets	あなたのために 私の未練は
(La parure précieuse、❶p.449)	

⑲は葵の上死去の後に六条御息所が源氏に贈った歌である。1行目の「le sort」（運命）は「celle qui n'est plus」（もうないそれ）の運命であり、「celle」が女性単数の指示代名詞であるから、失われた葵上の命を指す。ここに「あはれ」の訳語として

「las」が入り込んだ形である。この訳からは、葵上の命を奪ったのが自分であることへの強い自責の念を読み取ることができるといえよう。⑳は亡き夕顔の乳母の夫の赴任に伴い筑紫に向かう舟上で乳母の娘が詠んだ歌である。2例ともに、故人を思う「あはれ」として「las」が用いられていることがわかる。

9. 「気持ち」を表す訳語 —toucher・admiration—

㉑山がつの垣ほ荒るともをりをりにあはれはかけよ撫子の露

(帚木卷①82頁、夏、不明、夕顔→頭中将)

Dût-elle mépriser	たとえ蔑むようなことになろうとも
la haie du rustre des monts	山の田舎の垣根を
veuille à l'occasion	時にはしてください
la rosée du moins donner	露がせめて与えることを
à œillet <u>une pensée</u>	<u>気持ちを</u> ナデシコに
(L'arbre-balai, ①p 35)	

㉒あはれ知る心は人におくれねど数ならぬ身にきえつつぞふる

(蜻蛉卷⑥245頁、夏、六条院、小宰相→薫)

Mon cœur ne le cède	私の心は負けない
à personne pour comprendre	人に 理解するための
<u>votre sentiment</u>	<u>あなたの気持ちを</u>
mais mon corps compte si peu	けれども私の身ははかない
qu'il pourrait bien disparaître	消えてしまいそうに
(L'éphémère, ②p 606)	

㉑は頭中将の昔語りの中での夕顔からの贈歌である。「une pensée」(思い、気持ち)が「あはれ」に相当する。2行目の「la haie」(垣根)が詠み手(夕顔)の比喩、3行目の「la rosée」(露)が頭中将の比喩である。㉒は、浮舟失踪の悲しみに暮れる薫への小宰相の君の贈歌である。「sentiment」(感情、気持ち)が「あはれ」の訳語である¹³。

10. その他の訳語

最後に、その他の訳語が用いられた4首と、「あはれ」の訳語がない1首をまとめ

て見る。

㊸ 深き夜のあはれを知るも入る月のおぼろけならぬ契りとぞ思ふ

(花宴巻①356頁、春、弘徽殿、源氏→朧月夜)

De la nuit profonde	深い夜の
vous aussi goûtez <u>le charme</u>	<u>魅力</u> をあなたも味わっている
la lune indécise	ぼんやりした月
qui approche du ponant	西に近づく
voilà qui je crois nous lie	これが私たちを結び付けるのだと思う

(Le banquet sous les fleurs, ①p 171)

「あはれ」に相当するのは2行目の「le charme」(魅力)である。そもそも原歌に悲しみ等のマイナス表現がないのだが、より明るく健康的で、まさに魅力的な訳となっている。歌の直前の源氏の心境である「いとうれしくて、ふと袖をとらへたまふ」(花宴巻①356頁)を、シフェールは「Au comble de la joie, dans un élan subit, il la saisit par la manche」(有頂天で、急激な高揚の中、彼は彼女の袖を捉えた、①p 171)としているので、この高揚感に呼応させる語として「charme」を選んだのであろう。

㊹ なべて世のあはればかりをとふからに誓ひしことと神やいさめむ

(朝顔巻②474頁、秋、桃園宮、源氏→朝顔)

Ne dussiez-vous	あなたがしなかりうと
m'entretenir d'autre chose	他のことについて話すことを
que de <u>nos malheurs</u>	<u>人の世の不幸</u> 以外の
le dieu me tiendrait rigueur	神は私を容赦しないでしよう
d'avoir enfreint mes serments	私の誓いに背いたことを

(La belle-du-matin, ①p 401)

神に仕える斎院の職を退いた姫君に、もう自分の求婚を拒否する理由はないでしょうと詠んだ源氏の歌への返歌である。「あはれ」の訳語として「malheurs」(不幸・不運)が選ばれている。原歌では「あはればかりをとふ」のは朝顔の姫君であるが、訳では「vous」(あなた=源氏)と主体が転換している。この場合、「源氏に言葉をかけられるだけでも神が許さない」となり、源氏を拒む原歌の表意がさらに頑なになっているといえよう。

㊺ ふかき夜の月をあはれと見ぬ人や山の端ちかき宿にとまらぬ

	(手習卷⑥318 頁、秋、小野、妹尼→中将)
Seriez-vous homme	あなたはそのような人でしょうか
à <u>ne point goûter</u> la lune	月を <u>楽しんで</u> まない
au cœur de la nuit	真夜中に
pour ne vouloir demeurer	滞在することを望まない
près de la crête des monts	山の稜線の近くに

(Exercices d'écriture, ②p 640)

小野の妹尼が代作し、浮舟の歌として中将に贈ったもので、泊まることをあからさまに促す詠みぶりである。「goûter」(味わう、楽しむ)が「あはれ」の訳語にあたる。原歌の持つある種の世俗的な雰囲気かうまく訳出されていると言えよう。

⑳朝霧に友まどはせる鹿の音をおほかたにやはあはれとも聞く

(権本卷⑤195 頁、秋、二条院、匂宮→大君・中君)

Le brame du daim	鹿の鳴き声
qui a perdu sa compagne	仲間を失った
au brouillard du matin	朝の霧に
croyez-vous que je pourrais	私ができるとあなたは思うのか
l'écouter indifférent	無関心にそれを聞くことが
(A l'ombre du chêne, ②p 349)	* 「あはれ」ナシ

八宮薨去後の匂宮の弔問の歌である。「あはれ」の訳語はなく、「おほかたにやはあはれとも聞く」の裏返しの訳「je pourrais l'écouter indifférent」(無関心に聞くことができない)となっている。

ま と め

以上、『源氏物語』作中和歌の「あはれ」について、シフェール訳における訳語を分類し検討した。紙幅の都合上逐一触れることができなかったが、シフェール訳全体的特徴をまとめると、音節についてはすべてが正確に5-7-5-7-7の31音とは言えないものの、できるだけ和歌の音数に近づくように努めたようである。そのために、現代フランス語ではあまり見かけないような用法(動詞の単純過去形や接続法半過去形など)や、原歌の時制と異なる時制(原歌:現在形→訳:半過去形など)が多用されている。また、「あはれ」の訳語に位置については、26例中17例が原歌の位置と合致

する。もともと古典的で格調高いと言われるシフェール訳であるが、和歌の翻訳となると上述のように音数や語の位置にまで配慮が及ぶため、本来あるべき訳文としての語順が入れ替わり、地の文の訳よりさらに複雑になっていることを強調しておきたい。

「あはれ」の訳語については、冒頭に述べたように 20 種の語が確認できた。それらすべてについて用法の特徴や意図を捉えるには至らなかったが、「秋のあはれ」を表す語として「*mélancolie*」（愁い、憂鬱）の固定的な使用が認められたこと（第 2 節）、「*pitié*」（哀れみ）が他者からのそれを求める訳に用いられたこと（第 4 節）、「情景」を表す場合と「人の心」を表す場合で用いられる訳語が異なっていること（第 5 節）、詠嘆の間投詞「*las*」が故人に向けた「あはれ」として用いられていること（第 8 節）などを認知したことは、大変有意義なことであった。「あはれ」の訳語選択における翻訳者の責任は軽くないが、折々の情景や複雑な心情を一手に担う「あはれ」をいかに訳出するのか、そのいくつかの方向性がシフェール訳から見て取れたといえよう。

注

- 1 2021 年 9 月 3 日に行われた日本古典文学多言語翻訳研究会「世界の中の和歌—多言語翻訳を通して見る日本文化の受容と変容—」（第 2 回）において、「山里の暁がたの鹿の音は夜半のあはれのかぎりなりけり」（『千載和歌集』秋下・319）のフランス語への翻訳を実践した。（これについての報告書が 2022 年 3 月に刊行予定）
- 2 ミシェル・ルヴオン 訳（Mich Revon, *Anthologie de la littérature Japonaise Des Origines au XXe siècle*, Paris : Delagrave, 1910）、ガストン・ルノンドー 訳（G. Renondeau, *Anthologie de la Poésie Japonaise Classique*, Gallimard, Paris : 1971）、ルネ・シフェール 訳（René Sieffert, *De cent poètes un poème*, Paris : Publications Orientalistes de France, 1993）、リョージ・ナカムラとルネ・ド・チェッカティ 訳（Ryoji Nakamura et René de Ceccatty, *Mille Ans De Littérature Japonaise*, Arles : Philippe Picquier, 2005）から該当する歌（45 番歌・66 番歌・75 番歌）を抽出し、総数で 10 の翻訳が確認された。
- 3 René Sieffert, *Murasaki Shikibu, Le Dit du Genji ; Magnificence/Impermanence*,

Traduit du japonais, Paris : Publications Orientalists de France, 1988.

シフェール訳『源氏物語』は、まず1978年に藤裏葉巻までが翻訳・刊行された。その後、夢浮橋巻までの翻訳がなされ、1988年に完訳として全2冊が刊行された。第1冊 (Magnificence) が桐壺から藤裏葉、第2冊 (Impermanence) が若菜上から夢浮橋である。本稿での引用はすべてこの1988年版による。なお、ルネ・シフェールの経歴等については、常田槇子氏「シフェール訳『源氏物語』における ombre の表象——桐壺更衣と桐壺帝の描写方法——」(『文学・語学』第213号、全国大学国語国文学会、2015年8月) に紹介がある。

- 4 『源氏物語』作中和歌の引用は新編日本古典文学全集 (小学館) 『源氏物語』①～⑥により、() 内に『源氏物語』の巻名、新編全集の巻・頁数、詠まれた季節、場所、詠み手→受け手、の順に示した。仏訳の引用は前掲注3文献により、第1冊 (Magnificence) を①、第2冊 (Impermanence) を②とし、仏訳の巻名とページ数を () 内に示した。
- 5 例えば、③の「Du séjour des monts/mélancolie vient accroître/le brouillard du soir/or me semble que le ciel/à mon départ fait obstacle」であれば、「La mélancolie du séjour des monts vient accroître le brouillard du soir, or il me semble que le ciel fait obstacle à mon départ」(山里の愁いが霧を濃くする、空が私の出発を妨げているようだ) のように、語順を入れ替えたり語を補ったりして全体の意味をつかむ必要がある。
- 6 歌の直前に「空もけしきもあはれ少なからぬに」(葵巻②48頁) とあり、シフェール訳では「l'aspect du ciel incitait à la mélancolie」(空の様子が憂鬱にさせる、①p.191) と歌と同じ訳語で「あはれ」が表現されている。
- 7 この歌の前にも「宮はただものをのみあはれと思しつづけたるに」(横笛巻④355頁) とあり、仏訳は「la Princesse, derrière ses stores, restait plongée dans sa mélancolique songerie」(王女は簾の後ろで憂鬱な物思いに沈んでいた、②p.170) と、ここでも(名詞と形容詞の違いはあるが) 歌と同様の表現である。
- 8 この歌にも直前に「所につけてこそ、もののあはれもまされ」(手習巻⑥327頁) とあるが、仏訳は「En des lieux où l'émotion est à son comble !」(、②p.646) であり、歌とは訳語が異なる。
- 9 前掲注3に挙げた常田論文には「原文に忠実な翻訳を目指し、翻訳するにあつ

ては、日本古典文学大系本、日本古典文学全集本、新潮日本古典集成本の他、論文なども適宜参照したとのことである」とある。

- 10 歌の直前・直後にある「もののあはれなるほどのつれづれに」(夕霧巻④488頁)、「あはれに見る」(489頁)の仏訳はそれぞれ「dans le désœurement de ces heures de mélancolie」(憂鬱の時間の無為の中で、②p 231)、「fut touchée」(感動した、同ページ)である。
- 11 仏訳は「Si elle daignait, ne fût-ce que d'un mot, me témoigner un peu de compassion」(もし彼女が一言だけでもわずかな同情を示してくださったら、②p 299)で、歌と同じ訳語が用いられている。
- 12 歌の後に「見たてまつる人もやすからず、あはれに悲しう思ひあへり」(明石巻②240頁)とある。シフェール訳は「ses compagnones furent saisis d'une tristesse inquiète」(仲間たちは不安な悲しみにとらわれた)であり、しいて言えば「inquiète」(不安な)が「あはれ」に当たる。
- 13 直後に「ものあはれなる夕暮、しめやかなるほどを」(蜻蛉巻⑥246頁)とある部分は「C'était à l'heure émouvante d'un mélancolique crépuscule」(夕暮れの愁いの感動的な時間であった、②p 606)となっている。

【付記】

本稿を成すにあたり、フランス語訳の難解な部分について、関西学院大学名誉教授である曾我祐典先生にご教示を賜りました。大変ご親切なお力添えに心より御礼申し上げます。